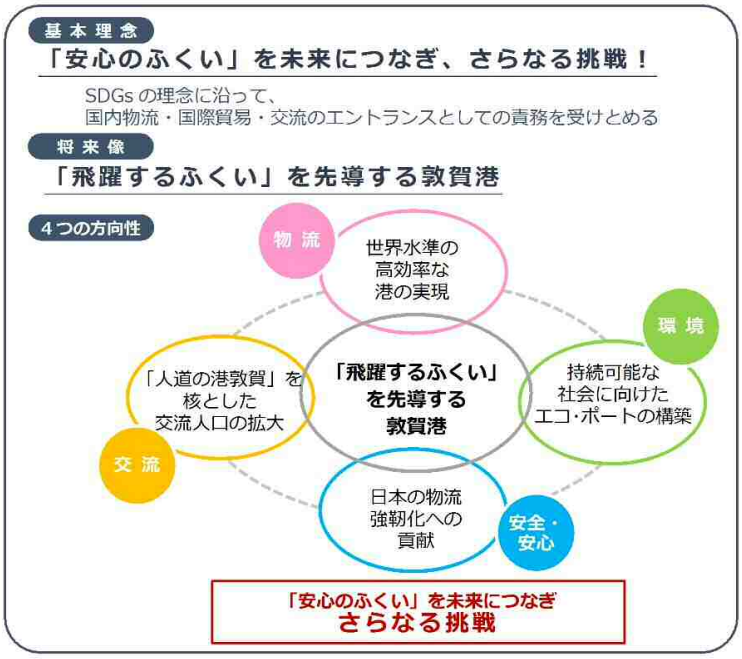
6. 敦賀港の将来像と基本理念・方向性



「世界水準の高効率な港の実現」

敦賀港の持つ大きな強みは関西・中京圏との時間距離の近さであるが、外貿貨物の集荷においては当港背後圏外への貨物の流出が顕著であり、逆に弱みともなっている。また、ヤード不足等からも明らかなように地形的に港近傍の土地の確保が困難であり、取扱貨物の拡大に向けて課題となっている。関西・中京圏との時間距離の近さから実現した内貿ユニットロードの拠点としての強みを活かし、ふ頭再編、ふ頭用地造成を進めるとともに先端技術の活用等により効率的な港の実現を図ることで貨物集荷につなげていく。

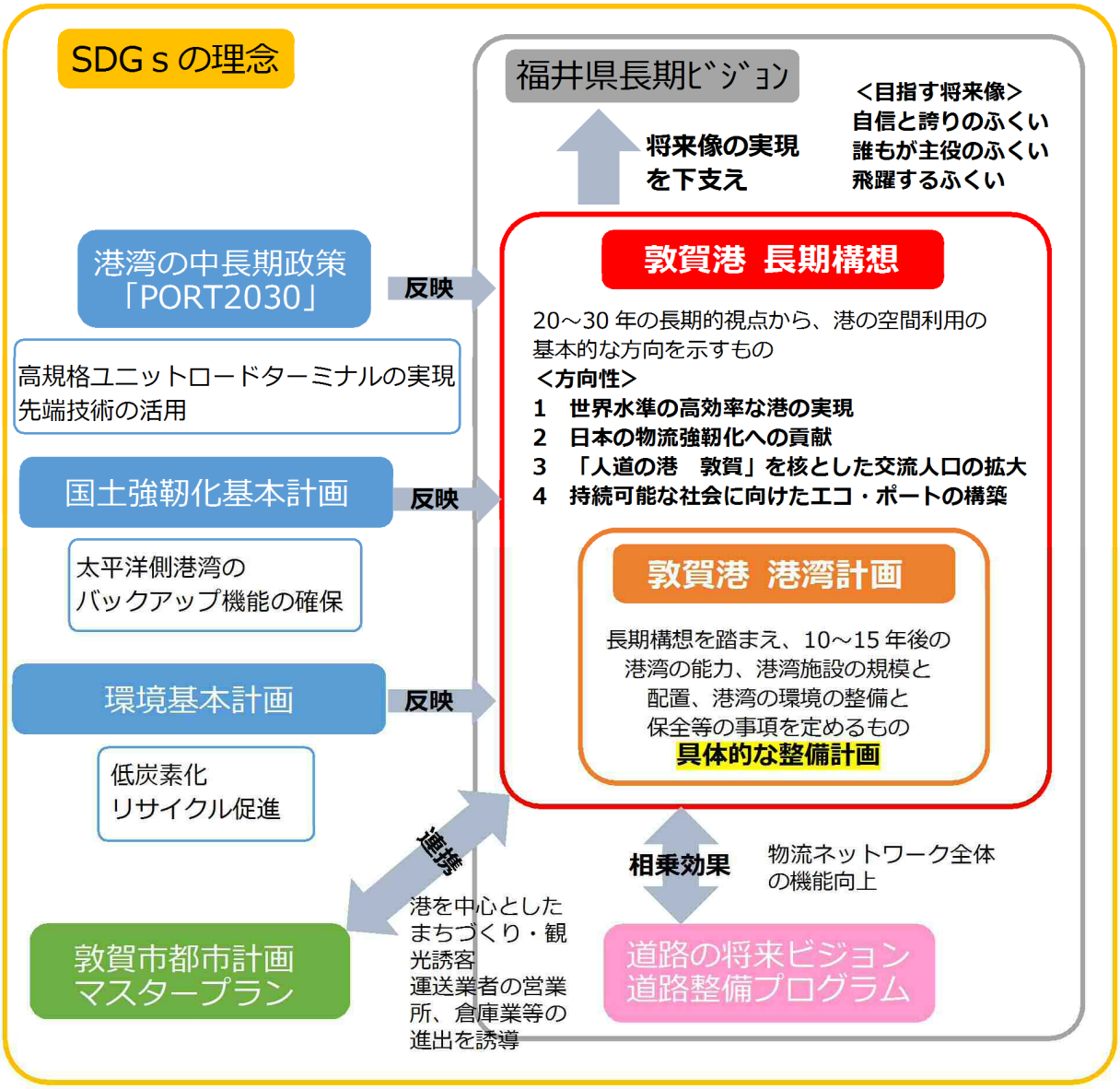
「日本の物流強靭化への貢献」

関西・中京圏との時間距離の近さを活かして、災害時の太平洋側港湾のバックアップ港としての機能を一定程度確保するとともに、高規格幹線道路の整備促進による港と一体となった物流ネットワークの強靭化を図り、企業 BCP、リスク分散の観点からポートセールスを展開する。

「「人道の港敦賀」を核とした交流人口の拡大」

敦賀港には我が国有数の古い歴史という強みがあり、北前船や欧亜国際連絡列車、ユダヤ難民の上陸など観光資源として有用なコンテンツを数多く有する。これらを活かし、北陸新幹線敦賀開業や将来の大阪延伸を見据え、クルーズ船誘致、港の賑わい創出を図る。

「持続可能な社会に向けたエコ・ポートの構築」

現在、敦賀港では、火力発電所とセメント会社のタイアップにより石炭灰（フライアッシュ）を用いたセメントの製造がおこなわれている他、バイオマス発電のための木質チップ等の輸入が拡大している。さらに地球温暖化防止や自然的環境の保全等、環境問題への対応を強化していく。

■ 参考図　敦賀港将来計画（長期構想と港湾計画）の位置づけ